縦二十二センチ、横十五センチ四ミリの半紙判の三卷の草稿。上卷本文四十丁。中卷四十五丁。下卷十九丁。弘化元年（一八四四）郷里伊勢で書いている。天保七年、十九歳のときの四國八十八ヶ所靈場參拜紀行。句讀點と濁點、平假名のルビ及びカッコ内の正誤は校訂者である。

文部省史料館藏

四國遍路道中雜誌（卷之一）

五十瀨松浦弘著

年來遍路の希い

兼而阿讃土豫の地は、弘法大師の遺跡多くして靈驗威德著しきと聞しかば、何時かは烏藤を曳て八十八ヶ所え靈場を遍路し奉らんことを希といへども、世の營に促るゝまゝ空く光陰を送ること茲に年有しが、何時かは佛緣にも班らましを思ふ時から、

天保七丙申の年才なり余歳十九　山陽之地ニ遊曆〔歴〕し、播備之兩州を經て下津井の湊備中之國兒島郡人家千餘軒に船を求て海上七り、船貸〔賃〕七十貳文、切手錢十三文、毎夜出船有　渡海し、莎笠奉遍路四國八十八ヶ所南無大師遍照金剛幷四句之文國所性〔姓〕名同行何人、又は壹人ならば二人と書、二人ならば三人と書こと此地の法也。

菅笠の書法

札挾の書法

納札七度廻りしは赤紙札十四度より青紙札十八度より黄紙札二十一度よりは白札杖

札挾〔挾〕南無大師遍照金剛其字を兩脇ニ書、中行奉遍禮〔路〕四國八十八ヶ所同行何人と書也。幷ニ國所性〔姓〕名を認む。壹寸五六分ニ五寸位の板二枚を合せしもの、此間ニ納札を入るゝ也。札所幷ニ接持〔待〕所幷宿屋等ニ而は此札一枚ヅゝを皆置こと也。此國に而は至而此札を尊信すること也。右納〔納〕札ニも右之如く書しるす也。七度廻りしものは赤紙札を納む。十四度より青紙納、十八度より黄紙札、廿一度より上は皆文字なしの白札を納む。其威德不思議有しことは追々卷中ニしるす故にこゝに略す。杖杉の木にて角ニ削る。上の方を五輪ニ剛〔彫〕、何れしも丸の五

讃州阿州の境

け村　此處茶屋貳軒斗有。庵寺有。行暮なん儀のものは止宿するニよろし。是迄讃州分也。境　讃州、阿州の境少しの峠也。少し下りて

ひかひ谷番所入切手

ひかひ谷御番所　阿州侯より小き番所を置らる。國ニ入るものは皆此所ニ而入切手と云ものをとりて持行事也。是より山道しばらくにして十番切幡村ニ到る。八十八番より五里。何れも山道に而よろしからず。

濱通り

また濱通りをしるさば　中野村より谷つづきを下ること三り斗にして　白鳥村　大内郡なり。町家貳百軒斗。町のうらは濱邊にして磯馴松有。町中ニ　白鳥宮　祭神日本武尊。祭禮四月、九月八日ニ市有。近村より群集す。一ノ鳥居、勅額門、社前ニ橘、櫻を植たり。五社明神　幷　稲荷社　幷ニ神馬屋。社家四軒。下馬札有て境内て廣く到而美麗なる處なり。又門の傍ニ鶴の宮とて鶴を置たり。

鹽砂糖

津田浦

此邊濱ニ而は鹽を燒、陸に而は砂糖を製し、土地隨分豐饒の樣ニ見たり。

○又志度寺より此處へ來るには、海岸通り路隨分よろし。二り半來りて津田浦。六七百軒の市町也。此邊りも鹽釜多し。半り來りて小松町。此間皆松原つゞきにして風景よろし。津田の松原とて古歌等有なり。又一り來りて白鳥浦也。貳り行て

引田醤油逢坂越

引田　千軒の湊。出入の船多し。故ニ商戸、漁家甍を幷て美々敷市町也。又此處より醤油を製す。鹽濱多し。越て壹り斗行、逢(追)分有。右へ行ば逢坂越と云を至し、三番之金泉寺之うらえ出る也。此道は源九郎義經の越給ひしと云傳ふ。其土地を案ずるに左も有べきやに思わる。碁の浦は中々馬の蹄の立べき道なし。ひがひ谷の方は廻り道也。逢坂、番所有。是又ひかひ谷ニ同斷。出入之切手

碁の浦

切手を改む

を改む。以上讃州路三十六丁道程三十六里五丁。

扨是より左りへ行ば　岩角嶮路をしばらく越て阿州分　碁の浦　此處山の厓にして右の方は數十仞の斷崖。左り之方は波浪岸へ打、一歩をあやまたば粉身碎骨ニなる地なり。番所有。出入之切手を改む。少しの坂を越五六軒ヅヽの村家數ヶ所ニ有。一り斗も行て

僻境

又田畑も有なり。此村迄は阿州分ニ懸りてより田畑少しも見ず。實ニ僻境と云もあまり有里なりき。

鬼骨寺

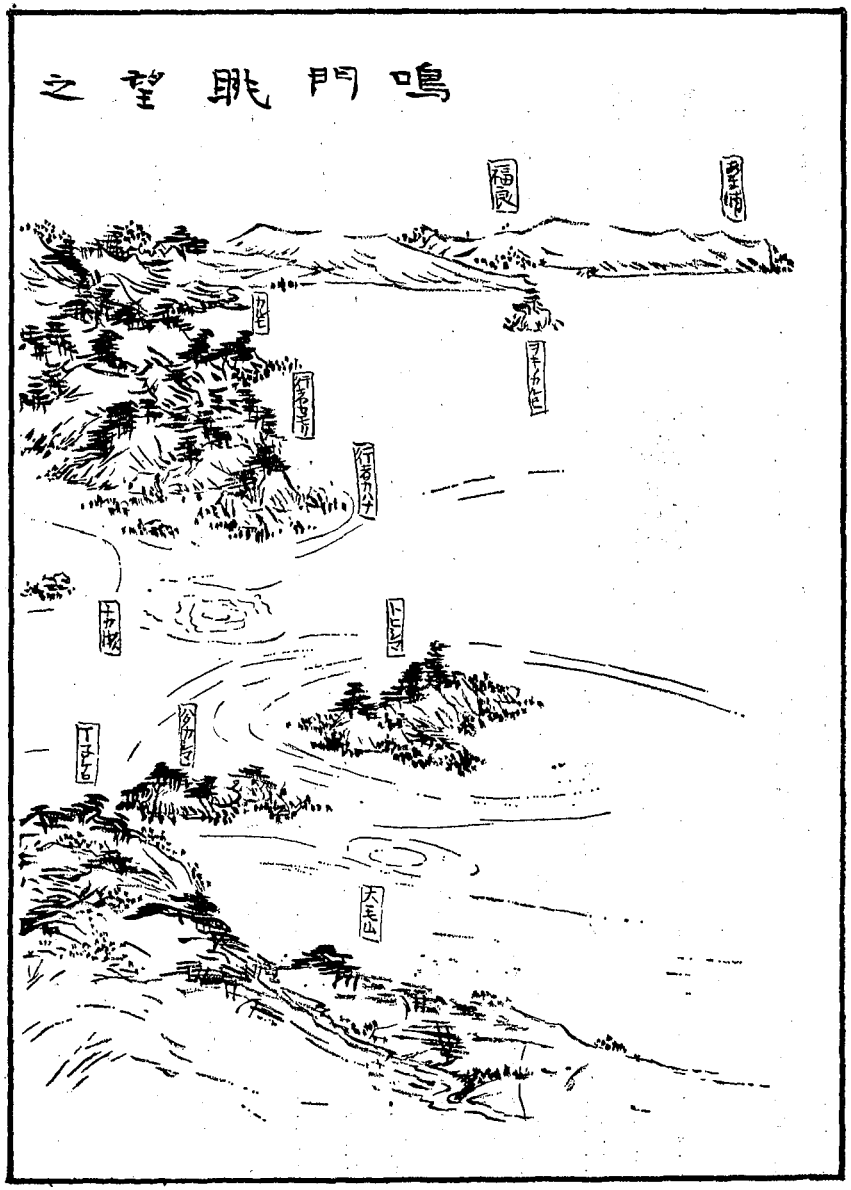
萬臺山鬼骨寺　板野郡鬼の尾村。淨土宗にして本尊彌陀三尊。圓光大師の開基也。境内に□の木の大木十三本有。皆杉なりニ造り甚美事也。當寺因緣書に昔此處ニ鬼人住たるを、源空上人四國ニ流罪になり給ひし比、御教化ましく〳〵て成佛を得させ給ひしと云傳ふ。其窟、村より五丁奥ニ有。又當寺ニ鬼の骨と云るもの有。百文ヅツに而開帳するなり。扨是より又海邊を行て四りにして

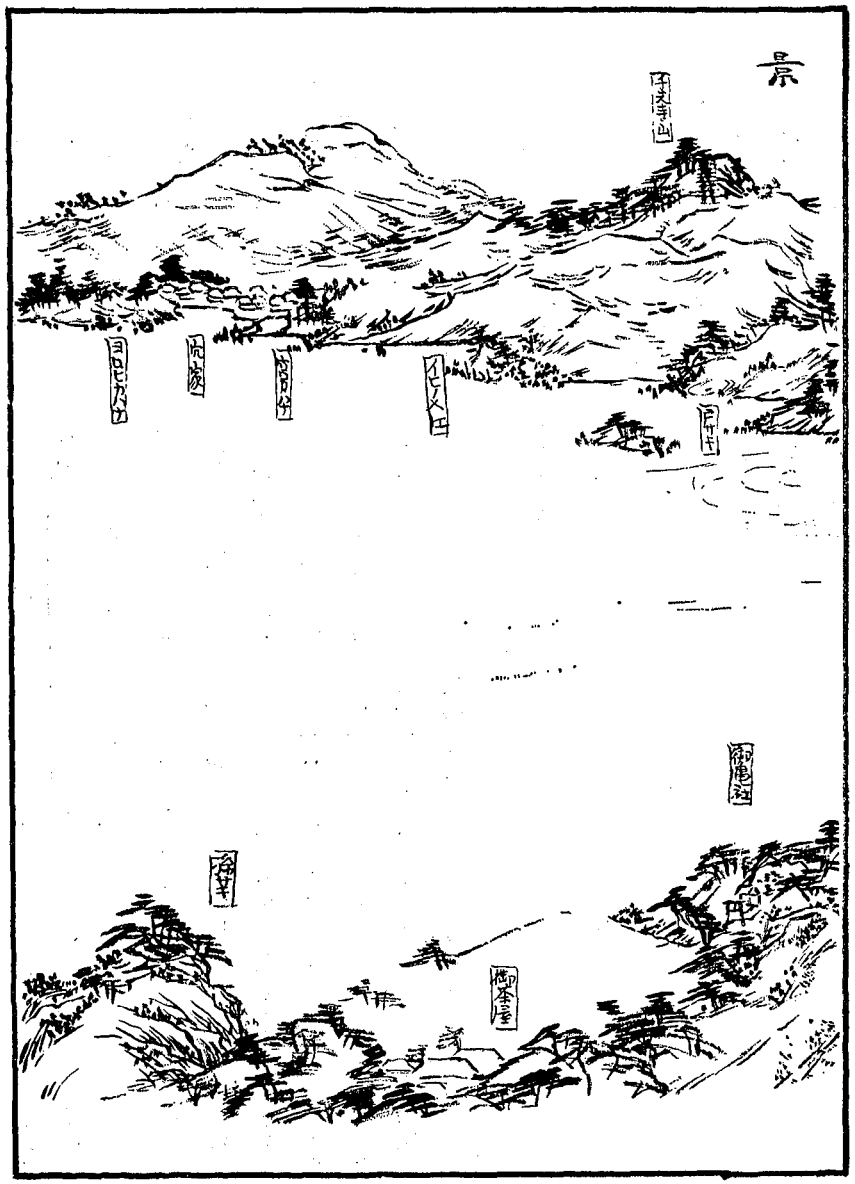
撫養

撫(撫)養湊　入口を土佐泊りと云。此邊り皆鹽濱にして繁華の地なり。商戸、漁擔甍を併べて美々敷所なり。　岡崎　幷て　早崎　幷て　宮の浦　幷て　安藝守　等一ツの湊をかこみて部落す。人家凡一萬貳三千軒と云傳ふ。此餘はしく〳〵ニ少しヅヽの在家多し。(原文抹消)從引田町四り。濱の方ニは船太(大)工幷船針(釘)鍛治。鹽燒濱。宮の浦邊ニ而は漁者多し。岡崎邊には女郎屋多し。木津上、土佐泊り邊ニは問屋、商人多し。實ニ繁華の湊なり。扨是より船渡しを越て壹り斗行て

大毛村　人家十二三軒。撫養分也。

亀大明神　此處より鳴戸眺望よろし。むかし鳴門より一箇の甍(甕)の上りたるを祭るよし。いつの比よりして亀の少しうらの山を上りて


鳴門眺望之


景

字ニ書あらた　大毛山　此處より鳴門眺望の臺有而、春は撫養湊へ着し船頭　孫崎　幷　國主より
む。右の方　水主ども之遊散(山)場となる。又左り方を眺れば　に　御茶屋　建置り。
御巡國之時は領主此處ニ宿し給ふ也。又役人壹人常ニ相詰ること也。

鳴門

鳴門　向は淡路島行者ヶ鼻ニ對し、其間凡十八九丁と思わる。土人は壹りといへども左は無樣ニ思
わる。大海より滿來る潮も、中國の方より干る汐も滿干ごとに此門にあつまれば、汐のはや
きこと矢よりも疾く、其勢磐石をも轉倒すべく、順水ニあらざれば如何なる小舟大船をも渡ることかた
し。此門のさまを見るに行者ヶ鼻より此方はだかじま、丁子(ちやうし)がロへかけて暗礁ツゞきにして、左ながら
深しとも思われねども、其左右は如何斗りのことか深底をはかりがたし。干汐の時ニは右の方低くなり
て瀑布のごとく、滿汐の時は左りの方低くなりて落るさま如何ニもするどく、此方彼方ニ當る潮渦卷て
高く低く運動し、別而三月三日前後は近國の風(流)士皆此處ニ酒を携て來り給ふ。其眺望前ニ圖するが
故ニこゝにしるさず。因ニ歌をこゝに一ツ二ツしるし置に

三月三日前後の比

むこのうら朝ミつ汐の追風に　　阿波しまかけてわたる舟人　　人麿

ゑのこ草をのが種とてあるものを　　あわのなるとはたれかいふらん　　讀人不レ知

しかれども、人磨(文)の此里ニ來(抹)りしことは聞(消)ず。また歌
等聞侍るまゝしるす。また近來世の人のうたとて

夕されば鳴門の海のはやき瀨に　　雪こきまぜてさゆるうら波　　浪花　常房

此鳴門汐路になれし船人も　　なをかろうじて渡りやすらん　　同　蕪坊

音さへもすごく鳴戸のとう〳〵と　　渦まくのゝ字のふ恐ろしや　　〃

等也。また古歌に

さし汐のはげしくも有かしばししして　　鳴門の浦ニかゝる舟人　　サドノクニ　幽旨法師

まごさきにかゝりて見るやうそしの　　いくせになると渡りつくせよ　　西行法師

秋深く鳴戸の海の早汐に　　落行月のよどむせもがな　　御　製

いそがでや棹引をりて舟人も　　あすわなるとの汐やまつらん　　讀人不レ知

心してとまひきをほえ浮雲も　　雨になるとのおきつ船人　　從三位　成清

此餘も多きよしニ聞侍れども聞まゝを抄する。

磯崎

扨是より撫養の方ニ歸りて、濱ニ出るや　　磯崎　此處に松の大木有しとかや。今も其古
跡殘れり。出崎にして風景よろし。

立かゑりまたも眺ん里の海士の
おもがハりすな磯崎の松　　西行

里村
鳴門わかめ

幷て少し南の方ニ里村此處より若海布を出す。鳴門わかめ則是なり。又此村ニ人麿社少し下の方に清少納言の塚土人の云に清少納言ハしばらく此邊りに漂泊し給ひしと云。其跡なりとて方五輪の古き石塔有。又人麿の社も此邊りニ來り給ひしと云傳ふ。然れどもそはさだかならず。

浦風になびきにけりな里の海士の
たくもの烟りこゝろよハさに　　實方朝臣

木津上

尙此餘此跡多し。撫養、岡崎にもどり、市町ツゞキにして

木津上撫養の南のはしなり。商戸のミにして繁華の地なり。土人の言に此邊昔しは波打隙(際)なりしが、いつしかかゝる岡地ニなりしと云傳ふ。

木津上のうらにとし經てよる浪も
をなじ處にかへるなりけり　　菅家

砂糖、藍を製す

町の中程に護國山長谷寺眞言宗弘法大師の開基にして境内ひ(ろ)し。本尊十一面かんおん。寺内ニ金毘羅の社有。毎年十月十日御祭禮にして近在より群衆をなす。又入船之船頭水主集り來りて相撲を興行す。市町を出て左り德しま有。右一番は靈山寺へ行也。此間壹り半斗皆農家ツゞきにして致(至)而冨る土地なり。砂糖幷に藍を製す。しばし行て

一番靈山寺

遍路靈場第一番札所竺和山一乘院靈山寺板野郡板東村ニ有り。本尊釋迦、彌陀、太(大)日。皆大師之作也。此三尊皆別ニ小堂を建て安置す。中就(就中)釋迦如來を本尊としけるよし。天竺の靈山を此方へ移せしゆへ竺和山と號するよし。境内に大麻彦神社幷て律社又幷て中宮又幷て西の宮の社有。左りの方に大師堂前には二金剛右二ツは國主より造立せらる。茶堂有。又門前に茶屋貳軒有。泊るによろし。

詠　靈山の釋迦のみまえにめぐり來て
萬(よろず)のつミもきえうせにけり

二番極樂寺

又是より畑道行こと十二丁にして

第二番日照山極樂寺同郡檜村。開山行基菩薩。本尊阿彌陀如來。左り藥師如來。右彌陀如來。何れも行基菩薩の作也。大師堂。鎭守の社有。

詠　極樂の彌陀の淨土へ行たくば
南無阿彌陀佛口ぐせにせよ

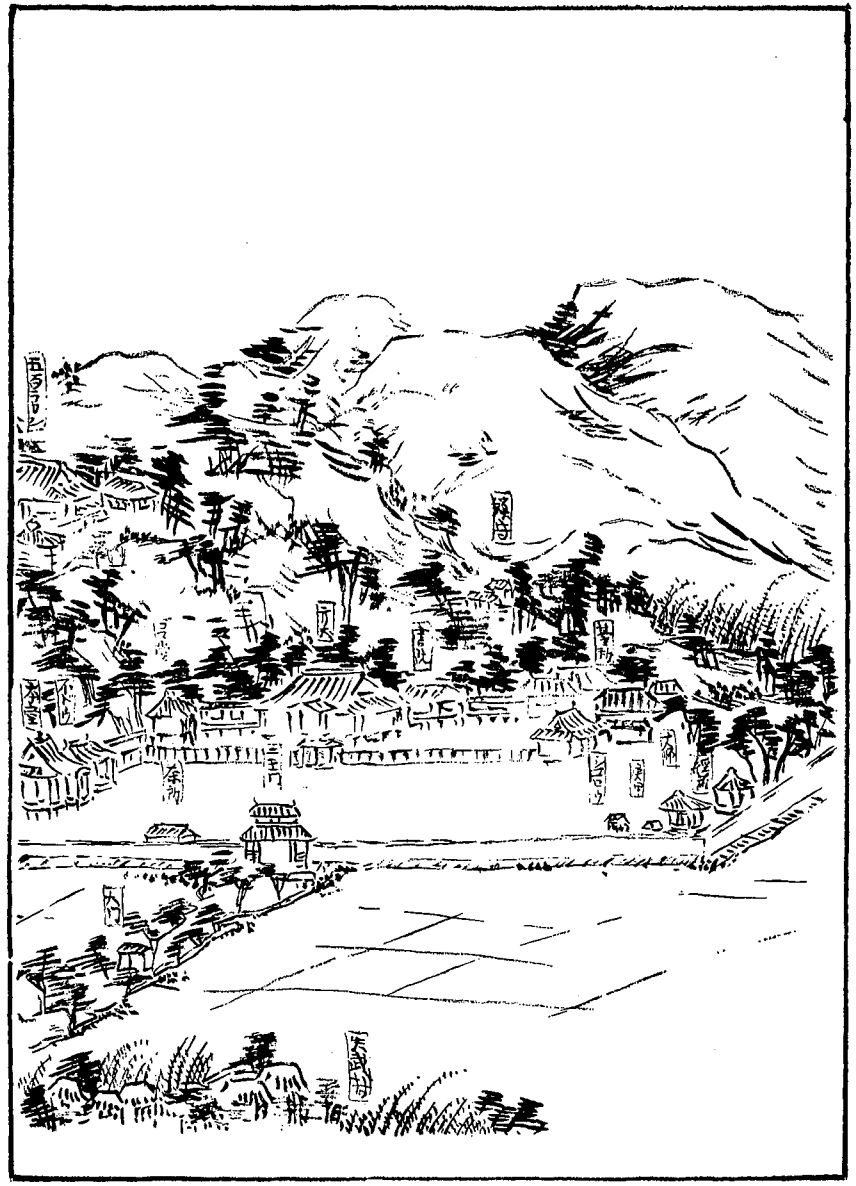
三番金泉寺

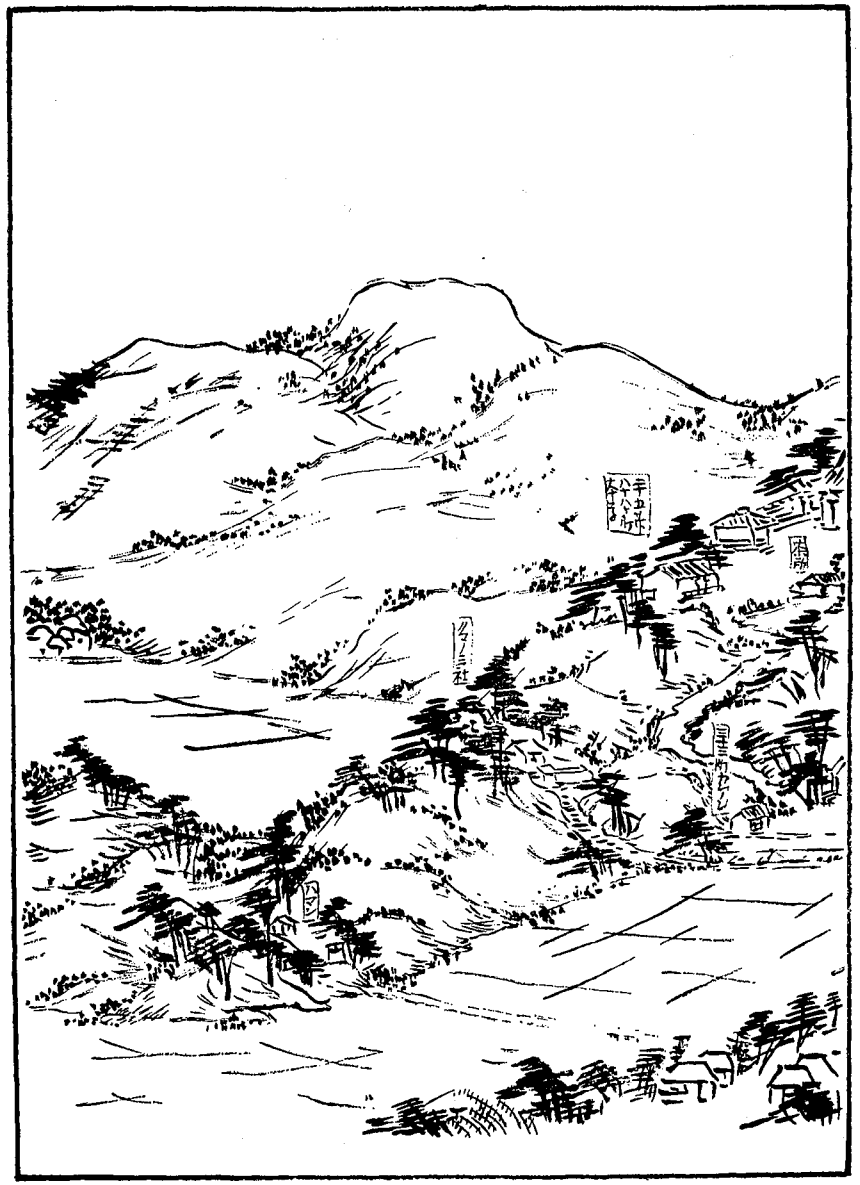
門前に茶所、茶屋等有。止宿せるによろし。畑道少し行凡廿五丁。行て河端村ニ到り、逢坂番所より入らば此寺のうらに來る。

第三番龜光山釋迦院金泉寺同郡大寺村ニ在り。弘法大師の開基也。本尊釋迦如來(な)り。御長三尺。七間四面の堂ニ安置し給ひしと。むかしは頗る大寺なりしニよりて村名ニ

大寺村

迄大寺と用ゆる也。又傍に五智如來の塔の礎有。此本尊は小堂を立て是ニ安置す。何れも弘法太(大)師の作





也。

春日社　幷　辯天社　小池の中に　龜山法皇の祠　幷　大師堂　等有。何れも物寂たり。

詠歌　極樂の寶の池を思えたゞ
　　こがねの泉すミたゝえたる

又寺内より打　黄金井　と云もの有。　小庵なり。大師御順行の時建立なりと。ツゞきて　犬ふし村　幷　なとう　村

ぬけする處に　しばらく行て　おかの宮大師堂　て

此處また茶店有。是より谷川ニそうて十八丁。のぼりて

四番大日寺

第四番黑岩山遍照院大日寺　從三三番一壹り。板野郡黑谷村ニ有り。大師の建立。本尊大日如來。御長壹尺五寸。弘法大師の作也。幷て　大師堂　幷　鎭守社　幷　三十三所觀音堂　等有。境内山ニそうてひろし。風景またよろし。　て

詠　眺れば月白妙の夜半なれや
　　たゞ黑谷に墨染の袖

少しの山道を越て下り、此邊農家そこ〻に部落す。土地隨分繁昌の場所なり。

五番地藏院

第五番無盡山莊嚴院地藏院〔寺〕　同郡矢武村ニ在。境内前ニ圖するごとし。從二四番一壹り五丁。弘法大師此處に而熊野權現に出合給ひし時、權現自ら靈木を大師に獻じ給ひしけるとかや。則大師其靈木をもつて一寸八分の地藏の像を剛〔彫〕、伽藍を建立して安置し給ひしニ、其後

大師傳說

後宇多帝之時住持感靈のこと有て、御長壹尺七寸の地藏を剛〔彫〕ミ右一寸八分の像を其旨〔胸〕に納め、幷ニ彌陀、藥師の像を作り、兩士として今置けり。

境内堂塔坊舍多し。其あらましをしるさば　惣門　左り之方ニ當りて　熊野三社　直ニ入て　二王門　入て左り之方に　茶所　幷　て

本堂　東に　三十三所觀音堂　是より山ニ上り　二十五菩薩堂　此堂内ニ八十八ヶ所之本尊を安置す。廻りて　奥院五百羅漢　其像大にして實ニ莊嚴は海内無双と云なるべし。下りて鎭守、經堂、大師堂、庚申堂等圖すればこゝに略す。

奥院五百羅漢

詠　六道の能化の地藏大菩薩
　　道引たまえこの世後の世

扨門を出て畑道行ことしばらく茶店有。又木ちん宿も處々有なり。農家皆砂糖を製し藍を耕る。　かんやけ村　しばらく行て　七條村　又しばらく行て　ひきの村　ニ到。

六番安樂寺

第六番溫泉山瑞運院安樂寺　同郡ひきの村。從二五番一一里。本尊藥師如來。坐像御長一尺三寸。弘法大師之御作也。寺内ニ幷て　大師堂　傍ニ　天照大神宮　幷　彌勒堂　等　て　有。

詠　かりの世に知行あらそう無益なり
　　安樂國の守護を望めよ

打ぬけに　高尾村　農家のミ也。茶店も二三軒有。境内を出て

熊谷寺山内之圖

七番十樂寺

第七番光明山十樂寺　從二六番一十丁。高尾村ニ有。弘法大師の開基にして本尊阿彌陀如來。幷て鎮守の社傍に大師堂等有。

詠歌　人間の八苦をはやくはなれなば
いたらん方は九品十樂

門前ニ茶店有。止宿するによろし。此邊り皆農家にして田畑少し。原田村幷てどなり村此村より谷川ニ添て貳三丁行、茶店有。是より少し坂を上り

八番熊谷寺

第八番普明山眞光院熊谷寺　阿波郡となり村ニ在。從二七番一壹り。本尊千手千眼觀世音。立像御長六尺。佛舍利百二十六粒を御ぐしニ納めしよし。御足のうらに其記文有。脇立毘沙門天王、不動明(王)。供ニ運慶の作也。幷び三十二度身の像有なり。二王門には空海自筆の額を懸たり。入て大日堂向て眞光院本坊なり。幷て五輪堂ニ上稲荷社幷て青面金剛上に末社七社を合殿とす。石階と(の)上化城庵此處より眺望よろし。幷て十六羅漢堂幷て六地藏向て茶所向て三重塔石階を上りて鐘樓、休所、本堂又是より少し石階を上り大師堂右の方山の上高き處に鎮守社眺望よろしくして境内前ニ圖するごとし。

詠　薪とり水熊谷の寺ニ來て
難行するも後の世の爲

扨是よりとなり村え下り、左りの方へ行こと畑道しばし行、庵有。田中村農家のミ。茶屋貳三軒有。砂糖を製す。少し行。

九番法輪寺

九番正覺山白蛇院法輪寺　從二八番一十八丁。同郡田中村也。本尊坐像。釋迦如來坐像一尺五寸。弘法大師の御作也。境内ニ地藏堂幷ニ大師堂傍に鎮守社幷有。境内幷ニ茶堂有。物寂たれどもひろし。

詠歌　大乘の祕方もとがもひるがへし
轉法輪の緣とこそきけ

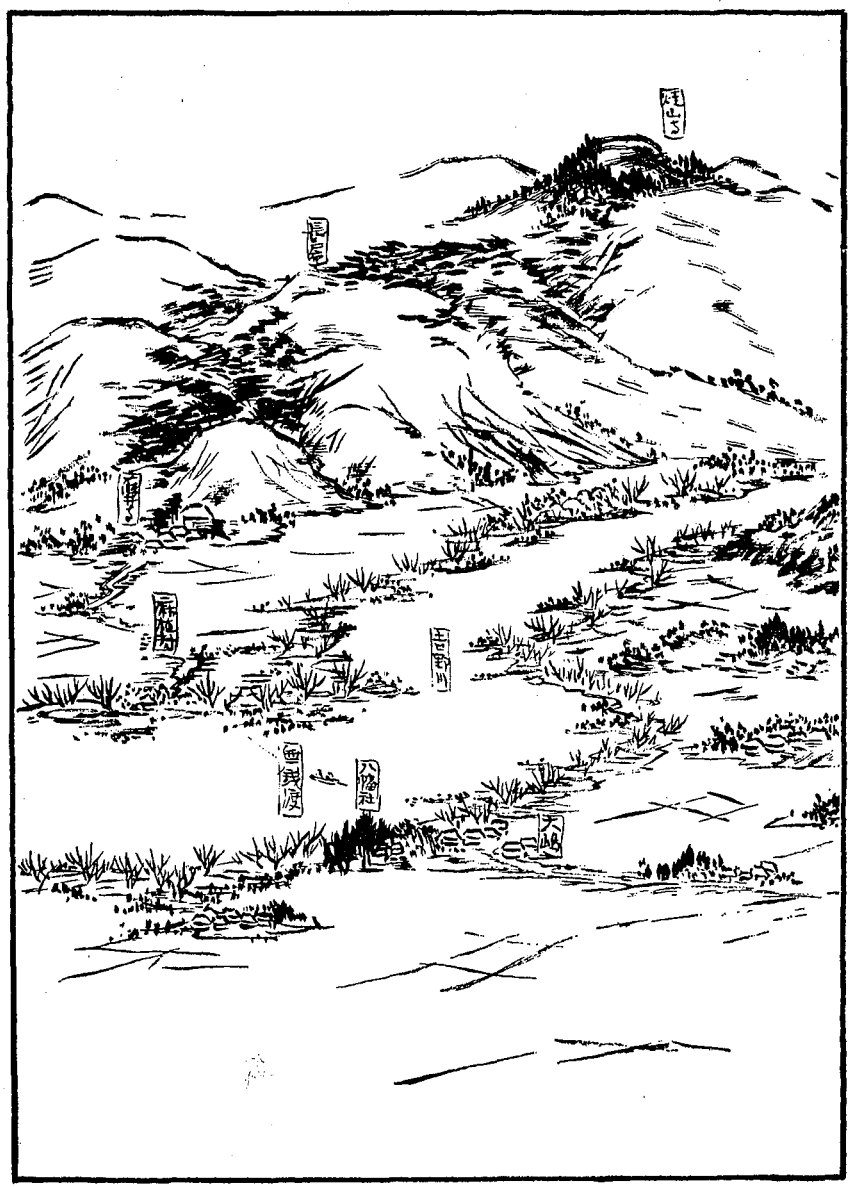
大師傳說

是より又打ぬけ畑道をしばし行て秋月村しばし行て切幡村此村之中に小豆洗清水大師堂有。此處而大師行暮給ひ、道の傍の木の陰ニ一宿し給ハんとなしける時、老婆小豆を一合持來り奉りしかども、是を洗ひて煑給ふニ水なかりしかば、自ら錫杖をもちて岩角を堀給ふニ水溢れ出たりと。其處に今庵を建て大師の尊像幷びに地藏像を安置し祭るなり。何れ浮屠氏の忘(妄)說とは思えども、古き庵のごとなればこゝにしるし置。扨是より坂を上る。九折嶮路也。

十番切幡寺

十番得度山灌頂院切幡寺　從二九番一廿五丁。同郡切幡村ニ有。又八十八番大窪寺よりひかい谷御番所を越來らば此處五りなり。甚近けれども是より逆に一番迄又納る時は、一番より又是迄打もどらねばならざる也。故ニ道程はさして何れの方も遠近なし。扨村より坂を三丁上りし處ニ大師の加持水有。是より五丁上りて石階少し有。此を上り二王門尊像は運慶作也。到而古風なる像也。此處より眺望よろし。北方は一面ニ見ゆ中門多聞天、持國天、皆運慶の作也。上りて大日堂幷て虛空藏堂正面本堂本尊は千手千眼觀音。不動、毘沙門を脇士とセり。皆大師の作也。大師堂少し上ニ鎮守社等うしろの方は峨々たる山ニ靠

舞錢渡之圖



緣起傳說

り、前ニは北方幷吉野川を眺、淡州、紀州は手ニとる如く見、其風景筆紙ニつくしがたし。此寺の緣記(起)に大師の(此)處に來り給ひし時、天より幡一流吹來りし故ニ山ニ攀登り見給ひしかば、南海數千里を眺望して如何ニも普陀落(註15)世界のさまなりしかば、救世菩薩の像を彫ミ一寺を建て安置し給ひしと云。又一說には此邊り之女織(機)をおりけるを、大師手拭丈無(心)せられしかば其織(機)おれども〳〵切(限)のなかりしとも云傳ふ。然れども何れも忘(妄)說らしく覺ゆ。

詠　よくしんをたゞ一すじニ切はたじ
　　後の世までのさわりとぞなる

是迄を十里十ヶ所

扨是迄を十里十ヶ所と云。是より又畑道を行ことしばらくにしてしてきれるなり。越て

吉野川永代無錢渡し

吉野川　阿州大一番の大川也。川上は土州、豫州の極山中より來る。永代無錢渡し也。皆領主よりまかなひ給ふ。越て麻植郡なり。しばらく行て

十一番藤井寺

十一番金剛山藤井寺　門前ニ茶店二軒有。止宿せるニよろし。從ニ十番ニ一り半。大師堂幷ニ大師堂　等美々敷立たり。又庭中ニ藤の大樹有。二王門、是また古きものなり。建立のよし。本尊藥師如來。御長三尺。大師の作なり。境内ニ鎭守社幷ニ地藏

詠　色も香も無比(非)中道の藤井寺

大野島村幷大八島て　此處よしの町有。茶店幷に泊り屋等有。又此町より少し東の方に一國一社の八幡有。社内隨分廣く

麻植村　人家こゝかしこニ部落しける。藍を多く耕れ(せ)

柳の水庵大師傳說

是より寺内をうしろへぬけて、松山の中九折をのぼること十五丁斗にして茶店一軒有。また是より貳十貳三丁も山の半腹を行てをかる。また是より十五丁上りて茶屋壹軒有。□□(ムシ)しばらく行半腹を山ニ添て行たりと。大師の尊像を安置す。また山の腹をしばし行て、

本尊地藏菩薩幷ニ大師尊像を安置す。へんろいたわりの爲に建立のよし。本尊藥師如來。御長三尺。大師の作なり。境内ニ鎭守社幷ニ地藏

長戸庵

本尊かんぜおん菩薩。大師を安置す。春より夏分は此處にも道心者壹人住す。此處に而弘法大師野宿し給ひし處なりと。又是より下らば谷合にゝかしこに家居す。村中川有。土橋を渡す。是をすぐ(原)に九折(文)をのぼる(抹消)ことわたりて道の傍に藥師堂有。越て九折ニかゝる。綠樹森々として甚物凄じき處也。其坂十八丁登るに如何ニも遍路中第一番と思わる。一丁目〳〵に石の標石あり。上りて二王門有。

遍路中第一番の九折

柳の水庵　此處は大師燒山寺へ上り給ふ時、途中ニ水無渴(なく)し□(ムシ)ふニより、錫杖に而小き柳の根を堀給ひしかば水溢れ出

十二番燒山寺

十二番摩盧山性壽院燒山寺　名西郡そうち村分。從ニ十一番三り。道甚遠し。本尊虛空藏菩薩座像四尺五寸。弘法大師之御作也。熱田大明神社幷ニ熊野權現社幷ニ大師堂地藏堂　等有。此寺山の高ミに有ども杉、檜、雜木陰森として眺望少しもなし。境内茶堂有。茶屋壹軒。止宿をするによし。

そうち村　山家也。谷のこ

詠　のちの世を思ハゞくぎ(註17)やうしやうさん寺
　　しでやさんづの難所有とも

また寺より十丁斗奥に

しんによの波のたゝぬ日はなく(註16)

大師傳說

奥院

といへるもの有。此處ニ昔し大蛇住し由。大師則此山を開き給ひし時、此蛇を教化し給ハんと護摩修行ましましたりしとかや。道わろくして甚なんぎなり。此邊ニ而の高山なれども、此頂上よりまた西を望む時は劔山は遙に高く見ゆる也。是ニ而當國の廣太〔大〕なることをしるべし。扨大門を出て九折を十八丁程下りて、少し樹木も少くなり、こゝに

杖杉庵大師傳說右衞門三郎

杖杉庵

本尊大師尊像に傍ニ右ェ〔衞〕門三郎が髪をさばき、石ニ腰打かけて杉の杖をつんばりたる姿を安置す。前ニ右ェ門三郎が杖の生しと云大なる杉の古木壹本有。其ゆわれを聞に、昔伊豫の國の大守右ェ門三郎なるもの邪見〔慳〕有慾のものに而、大師が洪〔功〕德をねたミけるが、後發心して四國を遍〔巡〕禮せんと八十八ヶ所を廻りしが、順ニ廻れば大師は逆ニ廻〔給〕ひ、逆ニ廻らば大師は順に通り給ひ、貳十一度の間大師に拜面することを得ざりしが、貳十一度滿願之時此處に而大師ニ行逢、則得度することを得此處に而死セしと。則此杖を此岩の脇ニ立しが、今繁茂して數圍の大樹となりしとかや。故に四國遍路の〔者〕等は皆杉の杖をつき竹杖を用ひず。此庵の庭より西を望まば劔山雲間ニ見え、南を望まば鶴大龍寺、黑瀧山等を見る。十丁斗下りてまた先の

杉の杖をつき竹杖を用ひず

そうち村

の川下ニ到る。此村人家は少けれども、一丁、二丁を隔て一貳軒ヅ、有故に、村の長さ凡壹里半も有と聞り。是より川を越て又坂え上り、十丁斗にして庵寺有。止宿するニよろし。しばし行て谷川ニ

阿川村

谷川の兩岸ニ家居す。紙を多製し麻をまた多く作る。田と云るは少しもなし。芋、甘薯麥めし

阿川村紙麻薯麥めし

添て下るニ諸の類を多く食ニ當て用ゆ。また蕎麥を多く作る。此邊りニ而泊ると蕎麥めしと云ものを振舞り。是はまた到而淡薄〔白〕なるよきもの也。其制〔製〕

蕎麥をむし而日ニ干、是を莚の上ニ而もむ也。左樣する時は殼飛而實斗殘る也。是を此邊りニ而は蕎麥

米と云也。此蕎麥米をひたし水ニ而炊ぎ喫すべし。又すまし汁ニ而用ゆる時は到而淡薄ニ而よろしきもの也。予は是を夜分芋、菜等を入雜すいに致し振舞われ、其翌日には飯ニ炊きて振舞ハれしが、其淡薄

今ニ忘得ざりき。

谷川ニ添て行まゝ

人情淳朴の風

しばらくにして

廣野村

此邊道の傍に竹を立是にわらんじをくゝり附、錢の丸を四ツ、五ツ位ヅ、書て直段をしらしうり置。また重箱ニ蓬餅を入道のはたにうり置。昔しより是を一ツとして盜去りしものなしと云傳ふ也。惣而阿波、土佐より伊豫宇和島、大洲領分丈は人氣まろくして少しもかゝる少しの盜賊のうれひはなしと。松山、西條邊か讃岐へかけてはお化遍路多くしてかゝることは少しもなし。しばしゆきて

お化遍路

入田村

此處に二本松の茶屋と云有。此邊歩行渡り、川多し。凡此邊り迄三り斗とも思わるが、村の上ニ一ツの大岩有。是を

ゆるぎ岩

と云。遍路のもの指に而押すニころ〳〵と音してゆるぐ也。然れども數圍の大石なればこかし見ると云ことは、中々數十人の力とても中々及びがたし。又是より十八丁程右へ下れば

ゆるぎ岩

一ノ宮奥院

と云ニ到る。此處數丈の岩壁有。是ニ大なる崖有て此内ニ藏王權現を祭る。また是より五丁程九折ニ添て下り

不動瀧

と云ニ到る。高五丈八尺と云り。水勢甚しく幅廣し。此邊りの岩角等へ三十三ヶ所之觀音の像を安置しける。また七丁是より下りて右奥院の別當職

觀正寺

と云有。是より又谷川づたひ彼入田村の部落ニそうて行こと二りにして

十三番一宮寺

十三番大栗山花藏院一宮寺

名東郡一ノ宮村ニ在。從ニ十二番ニ五里。又寺號を大日寺とも云り。本尊以前は大日如來を安置せしよし也。其像今絶て十一面かんおんの像を安像

〔置〕す。弘法大師の作也と。別當は花藏院ニ而、社家は笠原丹後と云て別ニ在る也。境内

本社〔原アキ〕本地堂　幷　大師堂　等有。又茶堂、店屋等有て門ニ而止宿せるニよろし。

詠　阿波の國一ノ宮とはゆうだすき
　　かけてたのむも後の世の爲

境内を打ぬけし、下りてすこし行、川有。越て畑道を行、二王門を入

十四番常樂寺

十四番盛壽山常樂寺　從二一ノ宮一十五丁。同郡常樂寺村也。本尊彌勒菩薩。弘法大師之御作也。坐像八寸也と。太師堂　幷　鎮守八幡社　幷　愛染堂　幷　大師爪形地藏　等有ニ　り。

詠　常樂の岸にはいつかいたらまし
　　ぐぜる〔註19〕〔弘誓〕の船にのりおくれねば

境内茶堂、茶店有。又門前ニ而止宿するニもよし。畑道少し行、二王門有。

十五番金色院國分寺

十五番法養山金色院國分寺　從二十四番一八丁。同郡國分村ニ有也。開基は行基菩薩。聖武帝の詔を奉じて建立し給ふ。當寺には昔紺紙金泥の大般若經在しと。今は其いさゝかを存するよし。本尊藥師如來。御長壹尺五寸の坐像なり。境内ニ大師堂　幷　烏瑟沙摩明王堂　幷　地藏堂　等有。又鎮守ニ　に　の小祠も有、

詠　うすくこくわけ〳〵色を染ぬれば

るてん〔流轉〕生死の秋の紅葉葉

藍

茶堂幷ニ門前に茶店等有て止宿するニよろし。惣而此邊り皆畑道ニ而道よろし。農家多く藍を作り諸國ニ出す。又村々ニも是を製する故ニ大なる富家有。然し其大なるものは致而富るよしなれども、其下百姓は又致而貧しく、暮しいたしにくきよしニ聞侍りけり。しばらく行て茶店有。二王門を過て

十六番千手院觀音寺

十六番光耀山千手院觀音寺　從二十五番一八丁。同郡かんおんじ村なり。本尊千手かんおん。御長六尺。弘法大師の御作也。脇士不動、毘沙門二士を安置す。境内ニ茶堂有。止宿するニ鎮守社　幷　大師堂　又　地藏堂　等有よろし也。

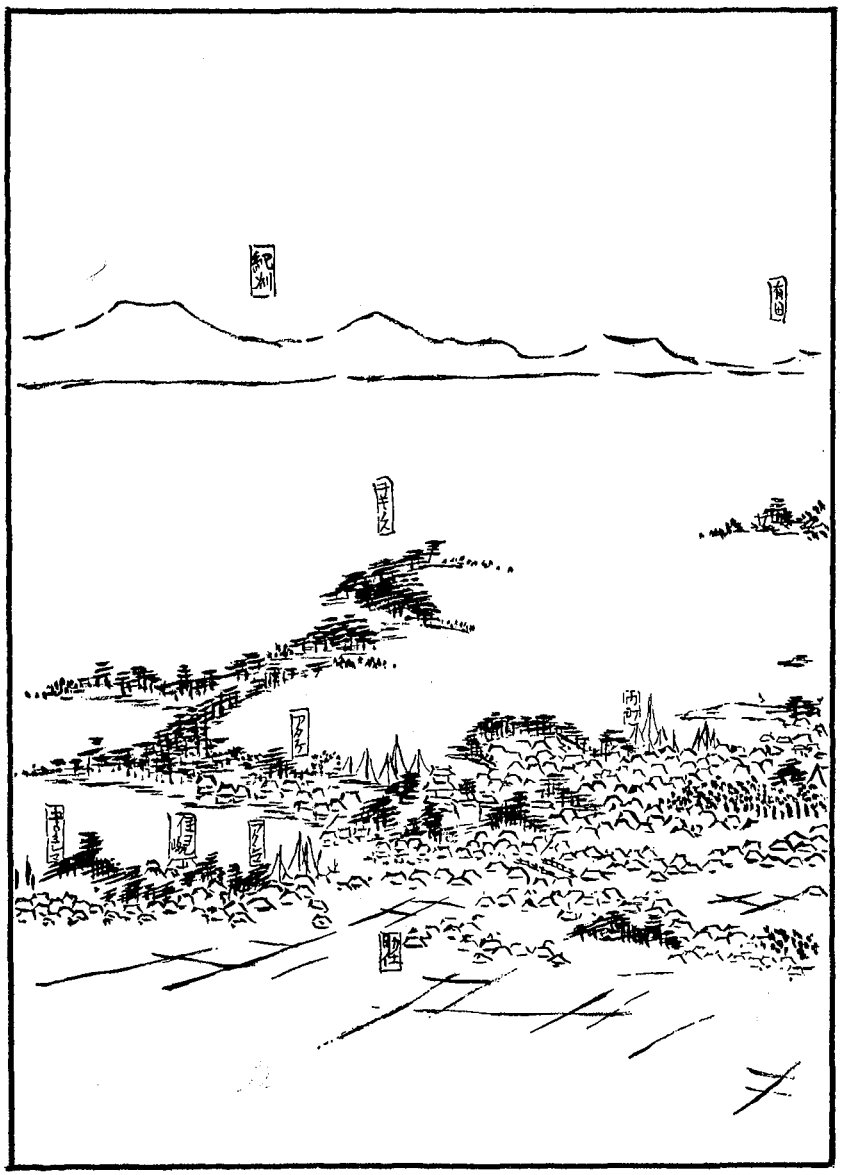
詠　忘れづも道引たまへ觀音寺
　　西方世界彌陀の淨土へ

十七番眞福院井戸寺

門前より右の方へ畑道すこし斗行て　かうの村　村内ニ茶店有。又　明神の社　有。甚大社也。何神を祭るやらん。しばらく行て　井土寺村　有。門を入て　又茶店幷小店等

十七番瑠璃山明照寺眞福院　從二十六番一十八丁。同郡井土寺村ニ有。故ニ是を皆井土寺と云也。本尊は聖德太子の開基とも、又行基菩薩の開基とも云り。本尊藥師如來。御長五尺。脇士ニ四天王を祭る。何れも皆是又同說ニ而何れの作なるか辨じがたし。境内ニ大師堂　幷　鎮守正八幡宮　幷　楠明神　等有。茶堂有。止宿するニよろし。

詠　おもかげをうつして見れば井戸の水
　　むすべばむねのあか〔關伽〕や落なん



扨打ぬけニ　あひく川（マヽ）　船渡し又渇水の時は橋ニなるなり。越而すぐニ町家ニ
しばらく行而　かゝるなり。井土寺より此町の入口迄廿五丁と云り。

徳島

徳島　城主蜂須賀阿波守様御居城ニ而其原
（原文アキ）

北の入口より南の出口ニ致（到）る五十餘町甍をならべ、助任、常三しま、住吉島、福島、阿たけ、寺町等は別而船着之地ニ而、諸國の廻船常ニ纜をつなぎ、また南のはしニ到る富田、才田、津田の漁浦ニは小船ニ棹さし、四時絶る間なく漁獵を業として其繁昌中々筆紙ニ盡さるべきことニもあらず。また城下内寺社多しといへども、別而其勝景とすべきものは寺町ニ

持明院

大瀧山持明院　といへるもの有。眞言古議（義）にして本尊藥師如來。弘法大師の御作也。二王門を入て正面は本堂。右の方方丈、庫裏甍をならべ、鐘楼、太子堂、八幡社、戒社。石階を上りて繪馬殿、天神の宮。又石階數級を上り右ニ上ること半町斗にして大塔有。是には則五智の如來を安置す。少し西ニ廻れば庵有。此處より東を望めば眼下ニ二十四ヶ寺之寺を眺、城内を一望し、沖の洲は海原ニさし出、富田ニは漁舟常に棹さし、才田ニは鹽燒烟雲ニなびき、淡路、紀伊の國は手ニとる斗ニミえ、其眺望いわんかたなし。一ツの橋を渡りて八祖堂幷に三十三ヶ所觀世音堂。行者堂。祇園の社は森陰たる樹の中ニ立せ給ひし。休亭（やすみ）是より一ツの瀑布を眺むニ數仞の岩壁ニ一道の瀧有。其瀧の上と下ニ橋有。上下より眺むによろし。如何ニもかゝる繁華の地ニかゝる名瀑のあること不思儀（議）とやいわん。下りて南ニ少し行ば

瀑布

春日の社　別當春日寺。　金毘羅の社　等有。何れも美々敷莊嚴なり。扨城下　越て板ば
又少し行て　を行ぬけ畑道を行ことしばらくにして　せミがはな　しを渡り　二軒

屋村　すこし　つめた川　又しば　法花川　越　畑道田道をし　ゐた村　幷　しほ村　又すこし　田野村
行而　し行て　而　西塔村　ばらく行て　而　ゆきて

ニ致る。茶店有。止宿するニよろし。村内より八丁のすこしの坂（原文抹消）を上りて大門。從二十七番ニ五り。

十八番恩山寺

十八番養母山恩山寺　勝浦郡田野村ニ有。開山行基菩薩。聖武帝の勅ニよりて造立し給ふ。本尊は藥師の座像。行基菩薩の御作也。其後大師再興し給ひ、四十一歳の御時母公御涕（剃）髮し給ふ。其髮を彌勒堂の下ニ納め給ふよし。境内ニ　彌勒堂　幷　大師堂　又　龍燈の松　等有也。又　大師加持泉、と云も
ニ　山の崖に　の有。

詠　子をうめるその父母の恩山寺
とぶらひがたき事ハあらじな

大師傳說

また堂のうしろ　奥院　と云もの有。偸伽、武守、秋葉の三社を祭る。また境内之茶堂幷ニ茶店有。
坂道三丁を上りて　止宿するニよろし。是より立江寺に打ぬけにて坂道壹丁斗を下りて道傍ニ

立江町

木の地藏　と云もの有。大師一夜ニ木の中ニ地藏像を　紫雲山釋迦庵　と云有。本尊は地尊（藏）菩薩幷ニ金
剛（彫）給ひしと。また其より貳丁斗を行て　泥大曼多羅を安置し、此庵より大師
御誕生之御影を施しニ出す。寺内ニ池　つかまき坂　此下ニ少しの鍛有。其中ニ大師之繦（襁）褓　立江町　少
有。此中ニ辯天の小祠有。少し行て　（襁）を納めしと云處有。畑道お十丁斗越て　し
の町也。茶店、商戸有。則立江寺の門前なる故に立江町の名を冠らしむ。二王門を入て茶堂有。平地なれど
も池有。風景よろし。

十九番立江寺

十九番橋池山地藏院立江寺

從ニ恩山寺一十九丁。勝浦郡也。本尊地藏菩薩。御長壹寸八分の像を感得し給ひ、則今の六尺の御像を作り其旨(胸)の内ニ納め給ひしよし也。境内ニ石の八ツ橋と池有。土俗言傳ふ。此池ニ白鷺いて、心ざしあしきもの來る時は追ふよし。故ニ此寺を四國云もの有。の御關所なりと云傳ふ。また堂内に女の髪の毛が鍔(鰐)口の緒にまきつきたる圖等を懸たり。其餘さま〳〵の不思議(議)をかたりける也。大師堂幷鎭守熊野權現等有り。尤本坊もよに ほどの大地(寺)也。

池傳說
四國の御關所

詠　いつかさて西のすまいのわがたち江
　　ぐぜいの船にのりていたらん

また是より鶴山へは門前の直道を行ニよろし。余は是より道を左りニとりて畑道を濱邊の方に十九丁程行て中ノ庄畑多く田少し。また村のこゝそこに松林多く、うらの方は濱邊なり。甘藷幷砂糖、藍を作

拳正寺

寶珠山拳正寺立江寺之奥の院と稱するもの也。本尊は、崖中ニ大師一夜ニ作り給ふ如意輪かんおんの像也。小寺有。道心者住居す。奥の院より十五六丁も西南の方に出ると遍路街道ニれり。

千丁あぜ

くしぶち村此邊り皆田畑入接り。農家隨分とめるよし見ゆ。又道より三十丁斗左り之方ニ、千丁あぜとて名高き廣田有。越て岩脇村ニ到る。星寺といへる寺有。出る

星谷村の窟

是へ廻る時は貳十町斗の廻りなるよし。山道甚なんしよにして嶮路也と云り。又寺ニ大師加持し給ふ星石と云有。又是より貳十丁斗西へ出て星谷村と云有。當村ニ三間ニ四間位の窟有。中ニ入て見れば一ツの瀑布有。其水清冷にして筆につくしがたし。其岩面皆白石にして鶴の奥院の岩の樣なるものなり。また半り斗上坂本村と云有。此處に而大師順行の時野宿し給ひしニ、霜ふかくふりしよ

取星寺と云也。

大師傳說

しニ而、かゝる程霜あつくふりては百姓もなん儀をすべしとて加持し給ひしとて、此村ニは霜ふらず。是より鶴林へ直にのぼるには十八丁の坂道を行なり。また是より右の方へ山に添て行時はしばらくにして横瀨村谷川の兩岸ニ有る也。村家まばらにして村ながし。此村より灌頂が瀧へ六十五丁。少しかつら川しばらく行て與川内村少し坂を越て坂本村またしばらく行てきわだ村此村より九折を十八丁上りて庵寺向の方ニ休所有。是より川のあなたを望むニ

灌頂ヶ瀧
御來迎の瀧
鶴山奥院

灌頂ヶ瀧　巾凡六尺斗。長五丈餘と思わる。數丈の崖に懸りたり。此瀧へ朝四ツ過晴たる時ニ日光の映ずるを、水烟もゆるがごとく見ゆる故不動尊の像現ずる等申傳ふ。又是を御來迎の瀧とも云り。谷をへだて拜する故ニ瀑布の巾分明ニしがたし。不動堂拜所ニ有。是より少し坂をのぼりて橋有。越てまた九折八丁をのぼり鶴山奥院と稱しける。

慈眼寺　本尊は大師自作の十一面かんおんの像有。行暮候節は止宿をゆるす。大師堂少し上りて大杉又貳丁斗の觀音堂幷ぼりて行地藏尊幷び

辯天社　向て籠堂中ニ大師の像を安置する也。

禪定

扨是より禪定をするニは、慈眼寺ニ而白き帷子を借用し、案内を乞松あかしを用て入ること也。壹人前松明火代五十五文ヅゝを出す。先下の方二十一の階子を上りて口巾三尺位の岩窟有。是ニ入行こと數歩、内ニは數々の佛菩薩を剔(彫)有。皆大師自作のよし。又此傍人の中に行べきにあらざる處ニ、壹丈斗の卒都婆壹丈有。是を大師の投卒塔婆と云えり。又此内ニ一條の川有。是を渡り行と大なる十三佛の像崖中の天井に切

大師の投卒塔婆
崖中天井の十三佛

瀧ヶ頂

付有る也。其さま中々人力の及ぶ處ニあらず。余此處ニ而其内のひろさを歩ミ見るに、凡七間ニ六間位もある様に覺えけり。此川水は何くニ落行やらんと案内之ものニ聞しかば、皆灌頂が瀧に致(到)るよし申けり。其より又歸りふかさを歩ミたれば、凡奥より口迄三十丈位と思われたり。出て又口の傍ニ役行者堂 又此傍より十六の階子を上り行て六尺面位の岩崖有。是ニ藏王權現の堂有。岩を見るニ皆石鐘乳に而白し。實ニ海内無双の靈場とも云つべし。扨其より又元の道六十五丁をうちもどりて横瀨村ニ來り、是より坂道をのぼる。

海内無双の靈場

道の左右皆杉、檜、陰森たり。少しの小川を渡りてのぼること十八丁にして

三寶荒神 幷 熊野三社 幷 二王門 上 六角堂 地藏尊を安置する也。追分 有。奥院よりの道と立江寺より之道と此處而出合也。余は横瀨村ニ荷物を置來りし故本街道もどり上る。少し上り出茶屋。茶堂。地藏堂 幷 十王堂 幷 護摩堂 石階上りて

廿番靈鷲山寶珠(樹)院鶴林寺

廿番鶴林寺大師傳説

(原頭註)詠しげりつる鶴の林をしるべにて大師ぞいます地藏帝釋又當時之緣記(起)に桓武帝の勅願所也と云傳ふ。其言緣起中ニ中興近江の國のもの

從ニ立江寺ニ三りと山道十八丁。本尊地藏菩薩。當寺始は大師此地ニ至り給ふ時樹の上ニ鶴有。翃の下より光明現ぜしニよりて大師其鶴をとくと御覽じけるニ金色の地藏尊なり。故ニその木を切て彼金の地藏の小像を旨(胸)ニ納め、三尺の像を剛(彫)ミ、伽藍を建立して永く衆生を濟度したまひしとかや。本尊左りの方に多寶塔 上ニ鎮守社 幷 鶴宮 少し南ニ當 辯天社 幷 大師堂 石階を下り 寶庫大師順行の時之遺物を納るよし。是より大龍寺へ打ぬけニ行ニ、道の傍ニ本坊幷て石寶院、愛染院、寶積院等、又是より森々たる杉むらを下ること十八丁にして

人の此邊りに而獵なりて住けるが、猪を射有る時、其ニ血をしるしほひしたこれば、此寺の大□の厨子ニ到り見れば其厨子ニ入たり。其よりは開き見れば本尊の旨ニ矢當り居たり。是に寺の住僧とかや。今二王門の塚と云もの有。道心を發し其先は大獵人の道をつくり法の道をつたえて同じ名にあふぐや鷲の山なるらん 常房

村といへども其邊りニ家は纔よりなし。皆谷合こゝそこに散在セり。村を出て少し行て川有。船渡し

大井村

鶴瀨川

と云り。又鶴大龍寺の間ニ在る故ニ中川とも云り。又那加郡に有故とも云り。永代無錢渡し也。上りて岩の傍ニ小堂を立侍たり。大師の像を安置す。又是よりして杉檜の多き中、坂道を上るなり。此間鶴より大龍寺迄一り半といへども、加茂村ニかゝる時は二りも有と。若杉村と云ニ四五軒も人家在るよし。扨坂道五十丁を上りて地藏堂 幷 制札 有。上ニ 二王門 入て此處より北の舍心と云ニ致(到)る。七ッ也。荒神社 中門を入て方丈、庫裏、臺所 寶庫 桓武帝より淳化(和)亭(帝)御代 鐘樓 石階を上り納經所、美々敷立たり。小門を又入て の輪(綸)旨皆是ニ納む。幷て 茶堂。茶店有。又傍ニ崖三尊 石階少し上りて 多寶塔 幷 地藏堂 幷 十王堂 上ニ 大師堂 幷 中興開山堂 此傍ニ數丈の大岩 多聞天下ニ 龍神社 幷 辯天社 幷 有。此上ニ小社有。て

廿一番大龍寺

北の舍心

彌山

廿一番舍心山常住院大龍寺

那加郡なり。從ニ鶴林寺一壹り半也。本尊虚空地(藏)菩薩。大師の作也。此寺は大師少年之時靈を感じ求聞持を修し給ひしと。其靈像は大師自ら三(註20)教指歸(しき)等ニ(書)給えり。往來より北の舍心へ五丁。南の舍心は往來より纔貳十歩斗なれども、何れも靈有て邪見のもの行ときは祟有と。また堂の傍よりうしろのかたそう輪塔 此處より又九折八丁を上りて岩窟有。幷て彌山 と云ニ至る。女人を禁じ又四ッ時より八ッ過迄參詣をゆるす也。此處ニ致ると奥院、黑瀧山(がりようさん)も見え、伽楞山等も見ゆるよし也。扨余は行ことを得ざりしが、是より八里奥に奥

鶴山圖

大師傳説

院、黒瀧山と云もの有よし。大なる岩崖なりと聞り。又此邊り之土人ニ聞にそして此邊の山中ニは岩窟多きよし也。皆慈眼寺の崖に似て白石也

南の舍心

と云り。扨是より下り堂の左りニ　鎮守社　下り道の左右ニ寺院　加持水　大師の加持水　杖杉　大師此彌山に登り給ひし杖也と。　南の舍心　小橋を越て行也。女人を禁ずるよ　三ヶ寺。石階を過て　也と。弁て　五六十歩にして　し。小堂有。何を安置するやらん。

詠　大龍の常に住けるげる(に)岩屋

しやしんもんじゆは守護の爲也

龍の崖庵大師傳説

扨是より坂を下りて左右ニ分れ道有。右の方直道。左りえ行ば九折少し下りて

龍の崖庵　本尊大師の尊像幷不動尊を安置す。流れニ臨ミて物凄じき庵也。又庵の前なる山ニ大なる崖有。むかし此處ニ大蛇住しと云傳ふ。然るを大師此山開き給ふ時ニ教化し給ひしと。十二文ヅツに而案内をする也。松明を用て入る也。是また七ツ下れば人を入ることを禁ず。又此上なる坂より右ニ行時は本道道よろし。しばし行　山口村　しばし　あせび村　此處に而本道と出合也。此邊ニ來り少し田畑も有。

廿二番平等寺

道よろし。少し過て　おゝね坂　越てしばらく　あらた村　那加郡なり。民家多し。茶店有。畑道を行て　止宿するニよろし。二王門有。

廿二番白水山醫王院平等寺　同村ニ有。大龍寺より本道三り。龍の窟ニかゝれば道あしけれども貳り半と云り。本尊藥師如來。坐像。御丈二尺。大師の自作也。堂の前ニ茶堂有。

又　白水　の井と云も　又傍　不動堂　有。又此寺の奥の院と云もの此村　と云もの有よし　の有。幷て　大師堂　に　のうしろの山凡壹り斗も上りて　ゆるぎ石　聞り。然れども

我も行ずともどりける。道甚なん所なるよしニ云傳ふ。

詠　平等にへだての無と聞時は

あらたのもしき佛とぞ見る

月夜村三日月庵大師傳説

扨是村を出　川　有。歩行渡り。越てこゝそこ　月夜村　と云り。農家こゝかし　三日月庵　從ニ札所ニ一りといて貳三丁行　に民家有。凡貳十丁斗も行　こゝ落々と散在す。

逆瀨川大師傳説

來幷ニ大師の尊像を安置するなり。止宿せるニよし。弘仁二年卯八月三日之夜大師此邊りを遍路ましけるニ、人家絶一宿のやどもなかりしかば、此所の石の上ニ座し一夜を明さんとし給ひしが、西の方ニ三日の夜の月耀々としたりしかば、手水をつかひ給ハんとこゝそこを見給ふニ水無りしかば、杖に而路上を穿ち給ふに清水涌出たり。實ニ不思議に思召自ら其處をしばし堀給ひしかば、水ニ光り有故不思議ニ思召其水底を見給ふニ一ツの石有。右の石に而藥師の像を剛(彫)まんとし給ふニ、早三日月は西山ニ落給ハんとし給ふニ、故大師西ニ向ひ今しばしと祈り給ひしかば再度又上ニ澄上り給ひしと。其ニよりて剛(彫)給ひ此處ニ一庵を建て納め給ひ、此處を月夜村と號給ひしとかや。庵の前ニ座禪石幷ニ大杉等有。少し行て茶屋壹軒有。是より

(原頭註)日和佐浦ニ□りまた岩と云もの有。□ニ少し南ニより□泊りと云有。此處□ニしま并ニ□波の小島等有。

鉦うち坂　越て少し行　さかせ川　歩行渡り也。此川ニ蜷多し。此貝昔しは尖(とがり)多くして歩行の足のひ(う)らをいためしかば、大師加持し給ひしニより、今の渡り場上下二丁斗の間ニ住る蜷には尖なり(し)。其上下は皆尖有て歩行渡りがたしと云傳ふ。越て少し行て　小野村　越てまた　坂　有。上下凡十四　五丁斗也。過て　たい村　又村を出て　しばし行て　とまこえ坂　上下凡半り　おう坂　上下凡十　ひわさたい村　少し行　少し斗　おた坂　越て谷川ニそ　くだり川　有。渡　北かわ斗越てまた　丁斗下り　行て　ひしばし行　りて

大竜寺真景

（原頭註）万葉集百傳のはまのうらはをこぎくれば阿波の小じまは見れどあかぬかも　人麿

二十三番藥王寺

ち村　幷びて少し行。名産海苔、青海苔を出す。日和佐浦　千軒の湊也。漁浦にして隨分繁華也。商戸有。又此處と紀州若（和歌）山、藤代邊と對して有る故、二月、三月比には紀州より施行物（せぎやうもの）を皆持來りてほどこす也。町中茶店有。少しの石階を上り二王門（ママ）を有。入て

二十三番醫王山無量（壽）院藥王寺　海部郡日和佐浦也。從二十二番一七り。新道近來出來る。少し近きよし也。本尊藥師如來。日月光菩薩幷十二神。皆弘法大師の御作也。然し本尊は行基の開基と云傳ふ也。古來は餘ほどの大寺なりしと聞り。（原文抹消）又寺内ニ大師此寺ニ而四十二才の御除厄有しと。後淳和天皇勅願として田畝を附（ふせ）らる。其後又清和帝御除厄の爲ニ御劔、錦の戸帳を納めらる。其後ニ到りて文治の比ニ後鳥羽帝御再興有しとぞ聞けり。古文書多きよし。大師堂　幷　二重の塔　本尊千手觀音。脇士二十八部。皆行基菩薩の御作也と云。前ニ茶堂有。幷て

厄除寺

堂　次　に　鎮守金毘羅社　幷　偷伽山白山　等　て　有。庚申堂　其外小堂小祠多し。昔しは餘程の伽藍なりしと聞り。今ニも當國之者女は十九才、三十三才。男は二十五才、四十二才等ニ皆此寺ニ參詣して除厄を祈るが故繁華也。

詠　ミな人のやミぬ（る）人（年）の藥王寺
るりの藥をあたえましませ

（原頭註）汐ひれバ玉もかりつゝ神代よりしかもたふときたまつしま山　赤人

また是よりして西なる山に六十餘丁程も行て玉津し山

奥院　と云もの有よし。大師自作之大日如來崖中ニましますと。其邊りの山ニ小像多きよし。皆大師自然の石ニ自ら剛（彫）付給ひしと聞けり。其餘濱有（道）越て　たかそね村　村中　大師

（原頭註）古城跡有、長曾我部元親日野中三郎左門尉住

堂有。止宿する　母川　渡りてしばらく行て　なき坂　甚嶮路也。岩角道ニよし。越て　甚わろし。下て　なき村　又少しの濱道。坂を越て下り小石濱に行て　宍喰　獅喰浦　人家百軒斗。漁家幷に農家也。此村完（宍）喰とも書り。浦ニ茶店有。止宿するニよろし。又村内ニ

圓通寺

鈴峯山圓通寺　と云る眞言宗の寺有。國主より遍路ゐたわりの爲ニ建置る。此寺の濫觴を尋るに、應安三年の比櫛川村の獵人獅子のぬたまちせしニ、鈴の音を聞て尋來て見たまひしかば此處ニ來りしと。則其處ニ大なる石三ツ有。今寺の庭ニ有る也。其石の傍ニかんおん龍馬ニ誇（跨）りて□（ムシ）るを拜し、發心して小庵を建住せしと。また此寺ニ龍宮より上りしと云る大釜一ツ有。其形三足鼎のなりして有。是ニ龍の形有等云傳ふれども見えがたし。上ニ鈴峯山と云山有。頂上ニ又小堂有てかんおんの像を置るよし也。麓より十八丁有と聞り。又當寺の傍ニ

傳説

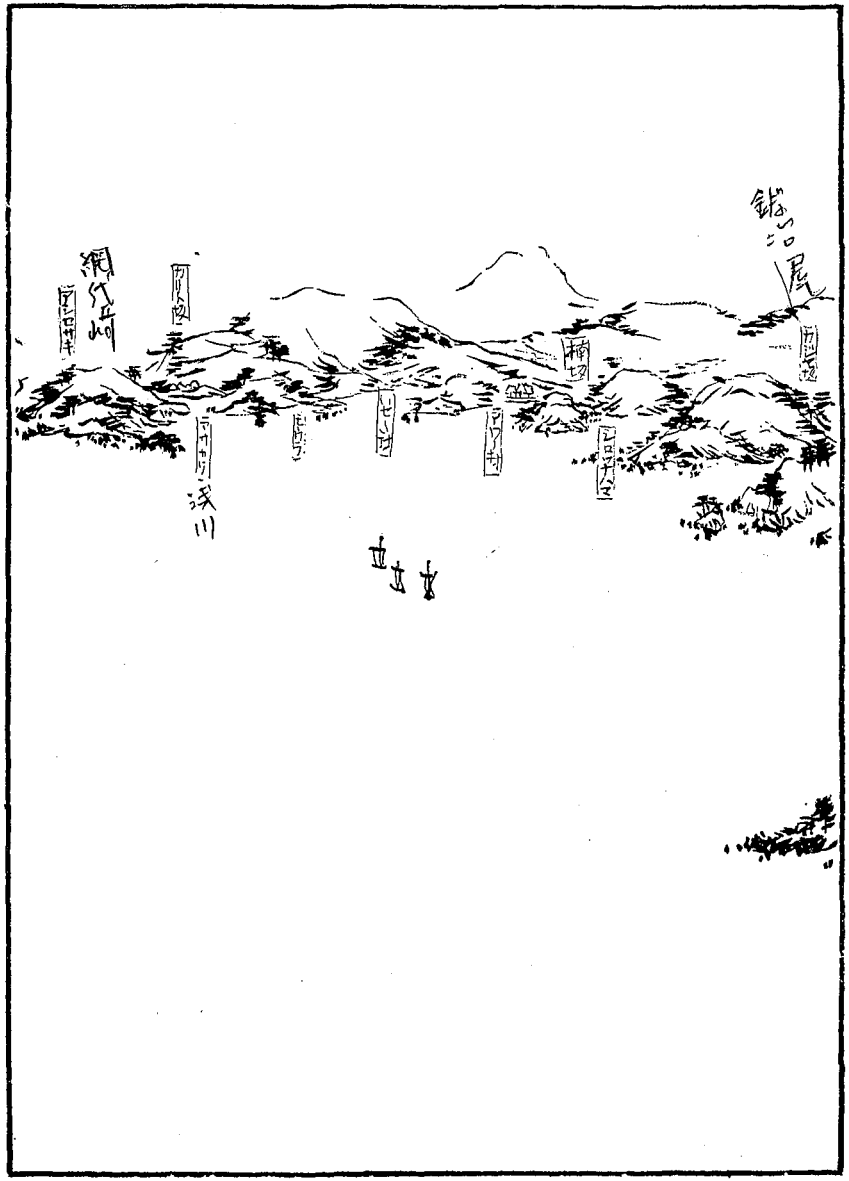
失山權現　の宮有。當所の産神也。庭中ニ古鐘有。明朝のものゝよし。其銘に

明昌七年丙辰四月日鑄成金鐘一重六十七斤德興寺懸排普觀旦那同共一心聖躬萬歲上棟梁戸長金仁鳳副頭梁延甫慶讃陣蓄孝

と有。渡來しものはあらざ（り）しかなり（ママ）。惣而此邊りはさま〴〵の器物をもてる（ママ）農家ハもてるよし也。扨是より町の出はなれに

番所ニ切手を納る

御番所　有。出入の切手を改る。則入口に而取來りし切手は此處ニ而納め而行こと也。國主より役人を置るゝ。越て九折を上ること凡十三丁。此處に兩州の標柱有。此より南海を望む時は目ニさわるものの無して眺望筆につくしがたし。以上阿州分四十八丁道五十七里半とぞ聞侍りけり。札所廿三ヶ所遍路之者



共、行暮宿無節は皆村々之庄屋よりさし宿を致し呉、實ニ川々は皆無錢にし而ありがたき國政とぞ思われたりける。是ひとえに大師之遍照金剛の威光ぞかしとあおがぬものぞなかりけり。南無阿彌陀〳〵〳〵。

（原頭註）是より東寺迄十一りと聞。從二藥王寺一拾里なり。

（註1）五大の種子。萬象の本原たる空、風、火、水、地を梵字で表わしたもの。
（註2）一丁字（いつていじ）。無學文盲の意。
（註3）延喜式の神名帳記載の神社。
（註4）梵語の音譯。浮圖とも書く。佛のことであるが、ここでは僧侶の意。
（註5）戰國の武將。土佐の雄。慶長四年五月十九日歿。六十一歳。
（註6）修理亮治長。淀君の僻臣。元和元年五月八日、大阪落城に殉死す。
（註7）滿農池。旱害救濟のための溜池。空海（弘法）は弘安十二年（八二一）この築造を監督した。
（註8）保元の亂に崇德上皇の召に第八子爲朝とともに戰い、敗れ、七月三十日誅さる。六十一歳。
（註9）權兵衛尉秀久。初め豐臣秀吉、後德川家康の麾下につく。慶長十九年五月六日歿。六十四歳。
（註10）高松城主。讃岐守。慶長十五年三月十八日歿。五十六歳。
（註11）源義經の四天王の一。文治二年屋島の戰いに死す。二十八歳。
（註12）繼信の弟。京、四條室町の第に討手を受け文治二年九月自殺。二十六歳。
（註13）宗高。下野の人。壽永四年二月屋島の戰いの扇の的で名高い。後薙髮し伏見卽成院に入り寂す。
（註14）佛の說法が衆生の間を回り轉じて、迷いを碎くことの法語。
（註15）南インドにあると傳說的に信じられる觀世音菩薩の靈場。
（註16）眞は眞實。如は如常。萬物の本體の不變の眞理をいう法語。
（註17）苦行（くぎよう）下の句は死出や三途。死出の山。三途の川。
（註18）倒すことの關西地方の方言。
（註19）菩薩があまねく衆生を救おうとする廣大な誓願の佛語。
（註20）さんごうしき。三卷。空海が儒、道、佛三敎の優劣を批判した宣言書。

四國遍路道中雜誌（卷之二）

五十瀨　松浦　弘著

より九折（つゞらをり）を下ること十丁斗。岩角路に尖りて其嶮なること筆狀しやすき（に）あらず。如何ニも當國の要とすべき番所とぞ思わる。下りて濱際に

扨峠番所

有。此處を甲（かん）の浦の番所と云。則往來手形幷に船上り切手を改め、此所より入切手と云ものを出す。其よりして當國に而は其泊り〳〵に而村長の印形（いんぎやう）をとり行也。何月何日此處泊りと皆書て印形を押出す。若此印形を失念する時は、先へ行て一宿たりとも宿かす人なし。又木錢（賃）宿に而もゆるさず。また庄屋よりのさし宿に而も中々出來がたし。（原文アキ）□□古城跡有。桑名將監ト云。元親近臣ナリ。

甲の浦

遍路の衆よく心得べきことなり。扨番所を入て

入切手泊り泊りに印形をとり行

此邊り之船澗懸りもするよしニ而、隨分繁華の地なり。人家凡貳百軒斗も有るやうに思わる。しばし行

白濱町

少しの町也。商戸、茶店有。村內明神の大社有。

すきて川

歩行渡り。山近く海近き故雨少しふる時は直ニ水增し、甚難所也。小石大石に而すべりてわろし。惣而土州は皆かゝる川多き故に心得べきこと也。此邊り

いくみ坂

少しの坂也。上れば四方を眺望するよき所也。

甲の浦

漁浦ニ而山の崖ニ家居し商戸も多し。

いく見村

農家、漁戸少しの處也。

あいま坂

少しの坂也。

皆濱道石原斗を行こと也。